



病院長
新家 眞

夏のご挨拶



今年も梅雨曇りと梅雨晴れが交互に来る季節となり、何となく其処ら中がジメジメしてきましたが、皆様お変わりございませんでしょうか、お伺い申し上げます。

さて当院の正式名称は公立学校共済組合関東中央病院と言いますが、昭和33年からは受診患者さんは、公立学校共済組合員(公立学校の教職員とその家族)のみでなく、広く一般の方々を分け隔てなく受け入れる一般病院となっていますので、実は‘公立’関東中央病院と略称した方が、社会的役目を正確に評しているように思います。さてその関東ですが、読んで字の如く関の東、箱根の関所の東は関東の事だとカンタンに思っていました、そう簡単でもなかったようです。律令時代の日本とは九州北部・山陽・近畿地方が開発の進んだ先進地域であり、三関(東山道の不破の関(関ヶ原あたり)、東海道の鈴鹿の関、北陸道の愛発の関(敦賀あたり))の東側、即ち関東地方は後進の開発の遅れた鄙の地域とされていたようで、その住人は‘あづまえびす’(東夷)、更に東の今の東北地方の住人はえぞ(蝦夷)でした。夷は中華に対する東の未開人が原義ですし、蝦夷の蝦に至っては虫偏ですので、推して知るべしでしょう。何か朝廷で変事があると、まずこの三関を固める事になっていたようで、要するに関東からの後進の不満・反乱分子が攻め上がって来る事を、時の朝廷は恐れた訳です。その関東が鎌倉幕府の時代を経て開発が進み、日本の中心地域となったのは江戸幕府時代であり、その時の三関は、箱根・小仏・碓氷の関で、これらの東は坂東八国でしたが、それが即ち関八州で今の関東です。しかし律令時代以来の、関の東と中(即ち近畿)の違いは、今でも不破の関(関ヶ原)が饅頭の汁の濃さの変曲点である等、文化や風俗に名残をとどめているようです。‘公立’関東中央病院も語源を遡れば、‘公立’東日本中央病院な訳で、そのせいかは知りませんが、本年3月に当院に竣工したメンタルヘルスセンターは、東日本の公立学校の教職員のメンタルヘルスを統括するという立場になっています。

さてその関東の中心にある東京都下の23区の中で最大の人口90万人を誇る、当院が地域医療支援病院を務める世田谷区ですが、現在人口の高齢化が急速に進んでおり、行政もその対策に躍起となっています。その一つが、所謂病院のみで医療と介護を行うのではなく、地域が一体となり種々病院―諸診療所―諸介護施設―行政が横一線ではなく、立体的に相互に補完し合いつつ地域完結型の医療・介護システムを構築していくというものです。人口高齢化以上に大きく変化しているのは、家族構成です。世田谷区は現在65歳以上の人口は全体の約17%ですが、65歳以上の世帯約1/3が独居(一人暮らし)であり、又1/3が老夫婦のみの二人暮らし(所謂老老介護)とされています。この後者の1/3はいずれ独居となるべく運命づけられています。これら従来病院・診療所に自ら受診しなくなる層が急激に増えてきているわけです。都市部では絶滅したかに見えた往診が復活し、24時間いつでも往診応需の在宅支援診療医と、往診診療のみに特化した在宅療養支援診療所が増えつつあります。当院もこれらの先生方との連携を深めつつ、世田谷区の地域完結型域医療の要としての地域医療支援病院の役割を発展させていく所存です。